

作家名	作品名	制作年	材質：技法	
1	三宅道子	心は君が影となりにき	2002(平成14)	ガラス、テラゾ(人造大理石)、鉄
2	岩田藤七	水指・雲間	1975(昭和50)	ガラス：宙吹き

1	江戸～大正期のガラス			
3	不詳	切り蓋物 <small>きりこふたもの</small>	江戸時代末期	ガラス：型吹き、カット
4	不詳	葡萄唐草文鉢 <small>ぶどうからくさもんぼち</small>	明治時代	ガラス：エングレーヴィング
5	不詳	月に雁秋草文鉢 <small>かりかり</small>	明治時代	ガラス：エングレーヴィング
6	不詳	草文杯	大正時代	ガラス：エングレーヴィング
7	不詳	宝珠形蓋物	大正時代	ガラス：カット
8	不詳	青色杯	大正時代	ガラス：宙吹き
9	不詳	青色杯	大正時代	ガラス：宙吹き
10	不詳	徳利	大正時代	ガラス：宙吹き
11	不詳	徳利	大正時代	ガラス：宙吹き

2	岩田藤七			
12	岩田藤七	色替舟虫手花器 <small>いろかきふねむなびしで</small>	1935(昭和10)	ガラス：宙吹き、アップリケ
13	岩田藤七	一輪挿・ナイル河 <small>いちりんすい</small>	1940(昭和15)	ガラス：宙吹き、色ガラス溶着
14	岩田藤七	トンボ玉風一輪挿	1936(昭和11)	ガラス：宙吹き
15	岩田藤七	花器・光りの美	1950(昭和25)	ガラス：宙吹き
16	岩田藤七	花器・おぼろ夜	1958(昭和33)	ガラス：宙吹き
17	岩田藤七	花器	1957(昭和32)	ガラス：宙吹き
18	岩田藤七	水差し・上野の動物		ガラス：型吹き
19	岩田藤七	茶碗・玄影 <small>ちawan</small>		ガラス：宙吹き
20	岩田藤七	茶入・朧 <small>おぼろ</small>		ガラス：宙吹き
21	岩田藤七	水指・寢屋 <small>みずさし</small>	1971(昭和46)	ガラス：型吹き
22	岩田藤七	花器	1966(昭和41)頃	ガラス：宙吹き
23	岩田藤七	貝	1974(昭和49)	ガラス：宙吹き

3	各務鑛三			
24	各務鑛三	花器	1929(昭和4)	ガラス：被せガラス：宙吹き、カット、手磨りによるつや消し
25	各務鑛三	皿・追憶	1929(昭和4)	ガラス：宙吹き、エングレーヴィング
26	各務鑛三	鳥獣文飾鉢 <small>ちようじゅうもんかざりぼち</small>	1930(昭和5)	ガラス：被せガラス、宙吹き、カット
27	各務鑛三	吉祥文飾鉢 <small>きっしょう</small>	1932(昭和7)	ガラス：被せガラス、宙吹き、カット、エングレーヴィング
28	各務鑛三	鉢・馬の目	1935(昭和10)頃	ガラス：宙吹き、カット
29	各務鑛三	飾花器 <small>かざり</small>	1969(昭和44)頃	ガラス：宙吹き
30	各務鑛三	鹿文花器	1948(昭和23)頃	ガラス：宙吹き、エングレーヴィング
31	各務鑛三	雀文花器 <small>すずめ</small>	1941(昭和16)	ガラス：宙吹き、気泡封入、エングレーヴィング
32	各務鑛三	ひょうたん型花器	1940(昭和15)	ガラス：宙吹き、エングレーヴィング

4	岩田久利			
33	岩田久利	鉢・輪違 <small>わちが</small> い	1977(昭和52)	ガラス：宙吹き、アップリケ
34	岩田久利	水指・道成寺 <small>みずさし</small>	1982(昭和57)	ガラス：宙吹き
35	岩田久利	花器・碗 <small>まん</small>	1991(平成3)	ガラス：宙吹き

作家名	作品名	制作年	材質：技法	
36	岩田久利	花器	1991(平成3)	ガラス：宙吹き
37	岩田久利	三彩盛鉢 <small>さんさいもりばち</small>	1993(平成5)	ガラス：宙吹き
38	岩田久利	台付流雲壺 <small>たいつりゅううんこ</small>	1993(平成5)	ガラス：宙吹き

5	デザイナーたちの活躍			
39	佐藤潤四郎	鉄粹吹込花器 <small>てつすいふきこみ</small>	1986(昭和61)	ガラス、鉄：鉄粹吹込
40	佐藤潤四郎	三蔵法師舍利器 <small>さんざうほし</small> とカバー	1980(昭和55)、1984(昭和59)	ガラス：カット
41	横山尚人	緑の騎士 <small>きりし</small>	1993(平成5)	ガラス：宙吹き、ホット・ガラス・テクニック、接着
42	竹内伝治	コンポジション#24	1981(昭和56)	ガラス：キャスト、カット
43	竹内伝治	コンポジション#83	1981(昭和56)	ガラス：キャスト、カット
44	船越三郎	スリムなカプセル構成	1982(昭和57)	ガラス：宙吹き、カット
45	菅澤利雄	「本のシリーズ」より“禁書”	1982(昭和57)	ガラス：鋳造、カット、クラック

6	藤田喬平			
46	藤田喬平	飾篭・海の彩 <small>かざりばこ</small>	1980(昭和55)	ガラス：色ガラス粒と金箔による装飾、型吹き
47	藤田喬平	飾篭・十六夜 <small>いざよひ</small>	1982(昭和57)	ガラス：金属箔による装飾、型吹き
48	藤田喬平	飾篭・竹取物語	1992(平成4)	ガラス、銀：被せガラス、色ガラス粒と金箔による装飾、型吹き
49	藤田喬平	飾篭・飛鳥の春 <small>あすか</small>	1998(平成10)	ガラス、銀：色ガラス粒と金箔による装飾、型吹き
50	藤田喬平	飾篭・飛鳥の夢	1999(平成11)	ガラス、金：色ガラス粒とプラチナ箔による装飾、型吹き
51	藤田喬平	飾篭・紅白梅	2002(平成14)	ガラス、銀：色ガラス粒と金箔、プラチナ箔による装飾、型吹き
52	藤田喬平	風	1984(昭和59)	ガラス：宙吹き
53	藤田喬平	大皿・宇宙	1988(昭和63)	ガラス：宙吹き、インカルモ、モザイク・ガラス
54	藤田喬平	海と太陽	1997(平成9)	ガラス：被せガラス、宙吹き、光学ガラス：カット、研磨
55	藤田喬平	鶴鳴	2004(平成16)	ガラス：被せガラス、ホットワーク

7	多様な展開			
56	伊藤孚	セールスマン	1992(平成4)	ガラス、コンクリート：サンドブラスト
57	伊藤孚	円筒	2002(平成14)	板ガラス、鉄板：サンドブラスト
58	瀧川嘉子	境 KYOH No.53	1993(平成5)	板ガラス、鉄：接着
59	瀧川嘉子	光の行方シリーズ	2002(平成14)	ジクレ版画、紙
60	高橋禎彦	無題	1988(昭和63)	ガラス：被せガラス、宙吹き、フューミング(塩化スズを加熱・蒸発させて表面に薄い膜として接着)、サンドブラスト、接着

61	塩谷直美	月の空	2001(平成13)	ガラス：キャスト、カット、サンドブラスト、研磨
62	塩谷直美	嵐の予感	2001(平成13)	ガラス：キャスト、カット、サンドブラスト、研磨
63	イワタルリ	花器	1995(平成7)	ガラス：宙吹き
64	米原眞司	静かな赤	2001(平成13)	ガラス：被せガラス、宙吹き、ビックアップ、サンドブラスト、エッチング
65	松島巖	水玉文青雲虹彩器 <small>みずたまもんせいうんこうさい</small>	2001(平成13)	ガラス：ランプワークによるコアガラス技法
66	松島巖	紡がれた器 <small>紡</small>	1996(平成8)	ガラス：ランプワークによるコアガラス技法
67	西悦子	レースのボウル	1994(平成6)	ガラス：パート・ド・ヴェール
68	池本一三	SCENE 0212	2003(平成15)	ガラス：宙吹き、エナメル焼付
69	家住利男	P.040901	2001(平成13)	板ガラス：接着、ハンド・グラインダーによる彫刻、研磨
70	扇田克也	ワタシノアラゾラ	1991(平成3)	ガラス：キャスト、サンドブラスト
71	扇田克也	アメノヒモアル	1991(平成3)	ガラス：キャスト、サンドブラスト



北海道現代美術館

現代美術館

現代美術館

現代美術館

現代美術館

現代美術館

現代美術館

現代美術館

現代美術館

現代美術館

現代美術館

現代美術館

現代美術館

現代美術館

現代美術館

現代美術館

現代美術館

現代美術館

現代美術館

現代美術館

現代美術館

現代美術館

現代美術館

現代美術館

現代美術館

現代美術館

現代美術館

現代美術館

現代美術館

現代美術館

現代美術館

現代美術館

現代美術館

現代美術館

現代美術館

現代美術館

現代美術館

現代美術館

現代美術館

現代美術館

現代美術館

現代美術館

現代美術館

現代美術館

現代美術館

現代美術館

現代美術館

現代美術館

現代美術館

現代美術館

現代美術館

現代美術館

現代美術館

現代美術館

現代美術館

現代美術館

現代美術館

現代美術館

現代美術館

現代美術館

現代美術館

現代美術館

現代美術館

現代美術館

現代美術館

現代美術館

現代美術館

現代美術館

現代美術館

現代美術館

現代美術館

現代美術館

現代美術館

現代美術館

現代美術館

現代美術館

現代美術館

現代美術館

現代美術館

現代美術館

現代美術館

現代美術館

現代美術館

現代美術館

現代美術館

現代美術館

現代美術館

現代美術館

現代美術館

現代美術館

現代美術館

現代美術館

現代美術館

現代美術館

現代美術館

現代美術館

現代美術館

現代美術館

現代美術館

現代美術館

岩田藤七(水指・雲間)

1975(昭和50)年

(部分)

現代美術館

現代美術館

現代美術館

現代美術館

現代美術館

現代美術館

現代美術館

現代美術館

現代美術館

現代美術館

現代美術館

現代美術館

現代美術館

現代美術館

現代美術館

現代美術館

現代美術館

現代美術館

現代美術館

現代美術館

現代美術館

現代美術館

現代美術館

現代美術館

現代美術館

現代美術館

現代美術館

現代美術館

現代美術館

現代美術館

現代美術館

現代美術館

現代美術館

現代美術館

現代美術館

現代美術館

現代美術館

現代美術館

現代美術館

現代美術館

現代美術館

現代美術館

現代美術館

現代美術館

現代美術館

現代美術館

現代美術館

現代美術館

現代美術館

現代美術館

現代美術館

現代美術館

現代美術館

現代美術館

現代美術館

現代美術館

現代美術館

現代美術館

現代美術館

現代美術館

現代美術館

現代美術館

現代美術館

現代美術館

現代美術館

現代美術館

現代美術館

現代美術館

現代美術館

現代美術館

現代美術館

現代美術館

現代美術館

現代美術館

現代美術館

現代美術館

現代美術館

現代美術館

現代美術館

現代美術館

現代美術館

現代美術館

現代美術館

現代美術館

現代美術館

現代美術館

現代美術館

1 江戸～大正期のガラス

ガラスの製法は長崎から大阪、そして江戸へと伝わり、18世紀半ばにはさまざまな形の器が盛んに製造されていた。幕末には西欧のカット技法を模した切子ガラスがつくられるようになり、江戸や薩摩で質の高いものがみられた。

明治維新を機に、ガラスは産業化の道をたどり、ガラス製品は一般に浸透していった。日本人の生活に適した形式の器や、その好みにそった装飾が生み出される。しかし全般に量産の方に力が注がれ、芸術としてのガラスの分野は不毛であった。



不詳(切子蓋物)江戸時代末期
イギリスのガラスによくみられるストロベリー・ダイヤモンド・カット(方形に区切った中をさらにカットし細かい凸凹をつくる)を施す。

2 岩田藤七 IWATA Toshichi

1893(明治26)年～1980(昭和55)年

東京美術学校金工科、西洋画科に学ぶ。1931(昭和6)年、岩田硝子製作所を設立。1928(昭和3)年、帝展にガラス工芸で入選を果たし、その後、連続特選となって美術工芸界におけるガラスの存在を大いに印象づけた。

無色透明というガラス一般のイメージを破り、さまざまな色や透明度のガラスを駆使して、加熱状態の流動性を生かした伸びやかな作風を打ち出した。また、茶道具の世界にガラスを進出させるなど、常に新たな可能性に挑み続け、日本近代ガラス工芸の先駆者として大きな足跡を残した。



岩田藤七(具)1974(昭和49)
岩田藤七の伸びやかな造形性をよく示す。加熱状態でのガラスの流動性が、有機的な生命感の表現へとつながっている。

3 各務鑑三 KAGAMI Kozo

1896(明治29)年～1985(昭和60)年

ガラス表面への彫刻に強い関心を持ち、ドイツのシュトゥットガルト工芸学校でクリスタル・ガラスへの彫刻技法を研究。帰国後の1934(昭和9)年、各務クリスタル製作所を設立して、日本のガラス界にはじめて本格的なクリスタル・ガラスの分野を切り開いた。

重厚な器に大胆かつ繊細な文様を浮彫したり、泡入りの素地で質感を際立たせるなど、クリスタル・ガラスのあらゆる魅力を引き出し、日本近代ガラス工芸の先駆者として色ガラスの岩田藤七とは双璧をなす。



各務鑑三(皿・追憶)1929(昭和4)
ドイツ留学中の作品。深いエングレーヴィング(金属の小さな回転板を用いた浮彫)の力強い表現で高い評価を得た。

4 岩田久利 IWATA Hisatoshi

1925(大正14)年～1994(平成6)年

岩田藤七の長男として生まれ、東京美術学校工芸科に在学中から、東京工業大学窯業科ガラス研究室などで、ガラスの組成について深く学ぶ。岩田硝子製造所(旧岩田硝子製作所)に入社して経営面で父を助けながら制作を行う。

化学的素養にもとづき、あらゆる色合いと透明度のガラスを縦横に使いこなすようになり、端正な優美さと、無造作ともみえるほどの大胆さやグロテスクな要素が交錯した作風で、父の仕事の継承にとどまらない独自性を築いた。



岩田久利(水指・道成寺)1982(昭和57)
茶道具。箔装飾の上に多彩な色ガラス粉により連続する三角文をあらわし、端正で繊細華麗な趣に日本の古典的優美さを示す。

5 デザイナーたちの活躍

岩田藤七、各務鑑三両者の功績によって、日本のグラス・アートはスタートをきる。そして彼らの製造所等に所属した作家たちも成長し、しだいにガラスは芸術の分野に足を踏み入れていった。

第二次世界大戦により一時停滞を余儀なくされるが、1950年代半ばより息を吹き返し、各務クリスタルの佐藤潤四郎、佐々木ガラスの竹内伝治、保谷ガラスの船越三郎、菅澤利雄、日本陶器の横山尚人ら、ガラス製造会社に籍を置くデザイナーたちが、盛んな活躍をみせた。



佐藤潤四郎(三蔵法師舍利器とカバー)1980.84(昭和55.59)
奈良薬師寺に分骨された三蔵法師の遺骨を納めるために制作した舍利容器と同形。舍利器とカバーの表面の質感が対比をなす。

6 藤田喬平 FUJITA Kyohei

1921(大正10)年～2004(平成16)年

東京美術学校工芸科に学ぶ。岩田硝子製造所勤務を経て独立。わずかな資金で窯と数人の職人を短時間借り、そこで制作したガラスを売って次の資金を得る、いわゆる「壺借り」からスタートし、個展を舞台に発表を重ねた。1973(昭和48)年から、日本の伝統的な装飾感覚を生かした〈飾篋〉のシリーズにとりくみ、国際的に評価を得る。1977(昭和52)年からはイタリアのムラノ島で新たな制作の試みに着手し、同地の伝統技法を駆使した大型作品も手がけるなど、新境地を開拓し続けた。



藤田喬平(飾篋・紅白梅)2002(平成14)
〈飾篋〉の晩年に制作した一点。金銀に輝く箔と紅白のガラス粒を溶着。尾形光琳(紅白梅図屏風)への想いをうかがわせる。

7 多様な展開

1962年、アメリカで小型溶解炉が開発されたことで、個々の作家のレヴェルでガラスをアートの素材として用いることが可能となった。この小規模工房での個人作家によるグラス・アート、いわゆる「スタジオ・グラス」は、1978(昭和53)年に京都で開かれた世界クラフト会議等を通して日本にも伝わり、日本のガラス界は一層活性化された。多様な技法研究もすすみ、ガラス独特の流動性や、光の透過性、色彩などさまざまな特性を引き出しつつ、豊かな造形世界が展開されている。



伊藤孚(円筒)2002(平成14)
板状のガラスと鉄を組み合わせ、それぞれ表面を加工して独特の質感を与え、簡素さのうちに調和をつくり出している。



瀧川嘉子(境 KYOH No.53)1993(平成5)
板ガラスを組み合わせて多彩な光をとりこむ。中央の上昇・下降する階段は浮かぶように表され、境界部分への注目を促す。



米原眞司(静かな赤)2001(平成13)
球形の側面に赤い不透明ガラスを塗りつけたような表現。熱く流動するガラスを巧みに操り、そのダイナミズムを生かす。



松島巖(紡がれた器)1996(平成8)
熟したガラス棒を耐火粘土の芯に巻き付けていく古代エジプトの技法を採用。そこに現代の洗練された表情を与えている。



西悦子(レースのボウル)1994(平成6)
パート・ド・ヴェール(ガラス粉と接着剤を練って型に詰め、半溶融状態まで加熱)の手法で、柔らかさや暖かさを表現。



家住利男(P.040901)2001(平成13)
板ガラスを幾層にも接着しハンド・グラインダーで削っている。光が反射・透過して新鮮な視覚効果をあげている。



扇田克也(ワタシノアソナ)1991(平成3)
キャスト(鋳造)により成形。側面は磨りガラス状とし、家の形の内部にほのかに光がともるかのような暖かな表情をみせる。